様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１４２

研究課題名（和文）イメージの記憶とアナクロニスムをめぐる歴史人類学的研究

研究課題名（英文）Historical-anthropological study on the memory and anachronism of images

研究代表者
水野　千依（MIZUNO, Chiyori）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：４０３３００５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、西洋キリスト文化においてイメージが時代を超えて宿す記憶とアナクロニスムの問題を三つの事例において考察した。①アルプス周辺に点在する「主日のキリスト」に着目し、既存の多様な図像伝統がいかに混淆しつつ周縁的で逸脱的な図像を生成したのか、さらにこの像が新たな聖女を生み出し、他の聖人と混淆していく経緯を後づけ、その転生の論理を分析した。②ルネサンスに新たに流行したキリストの側面観肖像が、初期キリスト教時代の肖像や偽文書と結び付けられ、「古代性」「真正性」を事後的に付与される経緯を解明した。③聖像行列や聖像と聖遺物の演出のパラダイムを模倣することにより神性空間が増殖される現象を考察した。

研究成果の概要（英文）：I performed three case studies to think about the problem of memory and anachronism of images in European Christian culture. 1) I focused on the iconography of “Christ of Sunday” and analyzed the logic of transmigration of this image to a new female or hermaphrodite saint or another identity. 2) I considered how profile portraiture of Christ which was born in Renaissance Italy was granted ‘antiquity’ and ‘authenticity’ post factum by connection with the images and forged documents of early Christian period. 3) I investigated the multiplication of the Hierotopy through copying the paradigm of religious procession or arrangement of sacred images and relics, taking the cases of “Madonna of Impruneta” and “Savior of Sacta Sanctorum”.

研究分野：美術史

キーワード：美術史　歴史人類学　礼拝像　聖像儀礼　聖像譚　聖遺物　記憶術

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでの研究において、美術史学の方法論の再検証とともに、歴史人類学的手法でイメージの問題を再考する「イメージ人類学」の可能性を探求してきた。

1970 年代以降、西欧社会の価値体系や組織形態の相対性が認識されるにつれて、美術史学においては、素朴な実証主義や歴史主義に疑義を挟み、「中立で透明な主体」、「自律的な作品」という「近代」的な認識図式や西洋中心主義的な価値観を反省し、隣接諸学との領域横断的な対話により方法論的反省を自らに課す動きが見られた。その流れのなかで、狭義の「芸術」という概念を超えて、諸文化におけるイメージ一般の価値や機能を捉え直すイメージ人類学研究が萌し、様々な方法論的視座が提起されてきた。

こうした研究動向に共鳴しつつ、研究代表者は、「様式概念」が萌し「美的価値」への意識が高まったルネサンス期を対象とし、いわゆる「芸術」作品だけでなく、近代以降に遡及的に再定義された「芸術」という概念に包摂しえないイメージをも視野に入れ、当時の文化における多様な表象や象徴的行為の体系のなかでそれらが担った地位や機能やあり方自体を浮彫にすることを試みてきた。その研究の成果は、著書『イメージの地層』（名古屋大学出版会、2011 年、サントリー学芸賞、フォスコ・マライーニ賞、他受賞）などにおいて公表した。

しかし、これらの研究を通じて新たに見出された課題は多く、「作者性」、「様式」、「図像伝統」、「保存・修復」など美術史学の基礎概念をも再考する必要性を感じ、本研究で掲げた課題へと至った。

２．研究の目的

本研究では、西洋キリスト文化において、時代を超えて図像が宿す記憶とアナクロニスムの問題を、以下の二点を中心に歴史人類学的に考察することを目的とした。

①図像の伝統や意味をめぐる研究は、すでに図像学や図像解釈学において膨大な蓄積があるが、それらを踏まえつつ着目したのが、これまで「民衆的」、「周縁的」として看過されてきた図像に、時代や地域を越えた「長期持続」、ないしは、断絶を経つつもアナクロニックに再生する、ヴァールブルクのいう「残存 Nachleben」に比する性格を指摘しうる可能性である。具体的には、宗教改革や対抗宗教改革の図像検閲において聖像の多くが破壊や抹消や変容を受けたアルプス周辺地域に断片的に残る「主日のキリスト」という図像に目を向けた。

②イメージのアナクロニスム、あるいはルネサンス期の古代理解を再考することが、もう一つの課題であった。そこでは二つの研究テーマを設けた。

②－１：1204 年の第 4 回十字軍以降、東方から多くのイコンが略奪されて西方に流入すると、それらは同時代の作であってもキリスト教「古代」からの残存物とみなされ聖遺物に比する価値を認められた。さらにコンスタンティノポリスが征服された 1453 年前後からも、西方ではイコン熱が再燃し、東方イコンは蒐集の対象とされた。こうした初期キリスト教・ビザンティン美術リヴァイヴァルの気運が高まるなかで、文献学や古物蒐集趣味という人文主義的道具立てとともに「新たな」キリスト教の「古物」がいわば偽造されていくアナクロニックな現象を解明することを目的とした

②－２：キリスト教文化において頻繁にみられる宗教行列のなかでも、聖像や聖遺物を用いた事例を、古代異教の像儀礼やビザンティン初期のそれらとの関わりのなかで再考することを目的とした。とくに、ある権威を得た聖像が行列のなかで生成させる神聖空間が、他の地域において複製像を用いた儀礼よって模倣されることで、聖なる力の磁場が増殖される現象に目を向けた。また、複数の聖遺物や聖像が同時に行列に持ち出される場合、各々の像の地位やヒエラルキーや関係性がいかようであったのかについて、中世からルネサンスの事例を中心に検証し、社会構造や政治体制も視野に入れて理解を試みた。

さらに、行列だけでなく、聖堂内でも、権威を認められた礼拝像を演出する空間のパラダイムが他の場所で模倣される現象に注目した。この「トポミメーシス」ないし、「神聖空間の複製」の問題を、古代異教の像儀礼や配置の問題まで視野に入れて考察することも本研究の課題となった。

３．研究の方法

①の研究目的に関しては、アルプス周辺地域のキリスト教聖堂装飾の現地調査を主に予定していた。諸般の事情で十分に実現することはできなかったが、2014 年度に南仏地域の「主日のキリスト」像の現地調査を進めることができた。さらに関連図版・文献の蒐集、読解に努めるとともに、「主日のキリスト」の派生源のひとつ、ルッカのヴォルト・サント像についても現地調査を行った。加えて、2016 年度に白水社より出版を予定している人類学者カルロ・セヴェーリの『キマイラの論理（仮題）』の翻訳を通じて、文化的葛藤のさなかに生み出される多様な図像の混淆＝キマイラ的形象を理解する視座も得た。

②－１に関しては、ルネサンス期に興隆したメダルやコインにかたどられた「キリストのプロフィール肖像」に目を向け、それが事後的に「古代性」や「真正性」を付与されていく過程を、多くの図像の収集、分析と、当時の人文主義的文書（偽文書も含め）の解読により、明らかにするよう試みた。

②－２に関しては、トスカーナ地方で中世からルネサンス期に格別の崇敬を集めた礼拝像を特定し、それぞれにまつわる物語伝承

を多くの異説とともに検証した。さらに聖像の演出や儀礼については、当時の年代記等の古文書記録を基に解明するとともに、現地において経路なども調査した。

いずれの研究についても、学会等のシンポジウムで発表したり、成果を論文・著作で公表することで意見交換に努めた。

４．研究成果

①に関しては、とくに研究対象として注目した「主日のキリスト」像がアルプス周辺の様々な国にまたがって点在し、イングランドまでの広範な地域を視野に入れる必要があるのに加え、アクセス困難な僻地の祠のような小祈祷堂に存在することも多いため、未だ、現地調査は十分に徹底できているとは言えない。

しかしながら、文化的周縁地に特有といいうる図像選択（土着の地方聖人像に加え、「良き祈りと悪しき祈り」など、徳と悪徳を教える民衆的教訓図像、ペスト守護のための呪術的図像、等）、「連祷」のように様々な聖人像を併置して壁面を埋める特異な表現、祈願の文句を信者が壁画上に刻み付けた多くの痕跡、ファサードや側壁の「外壁」に呪術的図像を配する特有の図像プログラム、作品と受容者との双方的な関係性を彷彿させる例など、都市部にはあまり見られない図像文化の一端を把握することができた。

研究主題としてとくに注目した「主日のキリスト」については、すでにこの像が、「受難具」「悲しみの人キリスト」「ルッカのヴォルト・サント」など、既存の伝統的図像の組み合わせからなる混成的図像であることは、以前に著書の中でも論じたが、なかでも今回、キリスト像が女性化・両性具有化するだけでなく、聖セバスティアヌスなど他のアイデンティティとも混淆する事例を発見し、そうした転生の論理を、やはりキリストと聖セバスティアヌス（と「死」の女性表象）が混淆するニューメキシコの聖史劇とも関連付けながら、歴史人類学的に考察した。その成果は、「キリスト像のキマイラ的変容――イメージの記憶をめぐる歴史人類学試論」と題する論文において公表した。

さらに、キリストの身体各部が人間の罪の表象と結び付けられる本図像が、身体を記憶の「場 locus」とする記憶術的イメージの系譜に連なる可能性も想定するに至った。この点は、今後、研究課題の一つとしてさらに追究していく予定である。

②－１　本来、キリストの肖像は古くから正面観で描かれてきた。マンディリオンやヴェロニカの聖顔布がキリストの顔を拭いた布に映った面影に派生する以上、おのずと正面観がイメージの真正性を保証する形式とみなされたことは想像に難くない。しかし、1450 年代、そして特に 1500 年前後に、キリストのプロフィール肖像という新たな形式が流行する。いわばルネサンス期の「最新の」キリスト肖像と言えるこの表現が、キリストの生前にまで遡るキリスト教「古代」のエメラルド肖像に派生するという銘文を伴ったり、キリストをその目で見たとされるプブリウス・レントゥルスの書簡（偽文書）の記述と結び付けられたりすることで、「古代性」や「真正性」をアナクロニスティックに付与されていった経緯を考察した。その成果は、著書『キリストの顔――イメージ人類学序説』第 8 章において公表した。

②－２　ルネサンス期の聖像を用いた宗教儀礼として、フィレンツェ近郊インプルネータの聖母像を中心に調査を試みた。14 世紀以降の領土拡張政策を背景に、いかに（15 世紀からはメディチ家を中心とする）フィレンツェが、領土内部の各地の聖像崇敬をアプロプリエートし、聖像伝説や聖像儀礼を整備することで、都市を中心とする神聖なネットワークを形成していたのかを浮彫した。なかでも、聖像儀礼に複数の聖母像や聖遺物が参与する形態に着目し、それら相互の関係がいかなる政治的体制を背景に練り上げられたのかを分析した。考察すべき論点のすべてを公表するに至ってはいないが、聖像譚のナラトロジー的分析や、聖像と聖遺物とを組み合わせて神聖空間のパラダイムを構成し、それを領土内の他の聖像の演出にも複製する現象については、2014 年の地中海学会全国大会等で発表し、「キリスト教の視覚文化における「神聖空間」と「場の模倣」」という論文でも公表した。

さらにローマのラテラーノ教皇宮殿サンクタ・サンクトルム礼拝堂に安置される《救世主》像の聖像行列についても、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の《聖母像（salus populi romani）》とともに演じられる聖母被昇天祭での祝祭行列、複製によって各地で模倣される儀礼の問題、さらに古代ローマ時代の聖像儀礼との関わりも視野に入れて考察した。その成果は、著書『キリストの顔』第 5 章で公表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①<u>水野千依</u>、キリスト像のキマイラ的変容――イメージの記憶をめぐる歴史人類学試論、現代思想、査読無、44-5 巻、2016 年、282－305

②<u>水野千依</u>、キリスト教の視覚文化における「神聖空間」と「場の模倣」――トスカーナの聖母像崇敬を例に――、パラゴーネ（青山学院大学比較芸術学会）、査読有、2 巻、2015、17－41

〔学会発表〕（計　3　件）

①<u>水野千依</u>、予言の織物としてのヴェネツィア、サン・マルコ大聖堂装飾、美学会全国大

会シンポジウム、2015 年 10 月 11 日、早稲田大学（東京都新宿区）
②水野千依、「神聖空間」と「場の模倣」――トスカーナの聖母像崇敬を例に、名古屋大学文学研究科附属「人類文化遺産学テクスト研究センター」シンポジウム、2015 年 7 月 11 日、名古屋大学（愛知県名古屋市）
③水野千依、聖なるものと聖なる場、平成 26 年度第 38 回地中海学会大会、2014 年 6 月 15 日、國學院大學常盤松ホール（東京都渋谷区）

〔図書〕（計　2　件）
水野千依、筑摩書房、『キリストの顔』、2014、400
水野千依、他、中央公論新社、『知のミクロコスモス』2014、398

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　水野　千依（MIZUNO, Chiyori）
　青山学院大学　文学部比較芸術学科・教授
　研究者番号：40330055

(2)研究分担者
　　(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　(　　)

　研究者番号：